

## 植物園の大温室で咲いたショクダイオオコンニャク

最近、少なくとも私の身の回りでは、コンニャクというキーワードがすっかり定着し、コンニャクと言えば「植物園の大温室で咲いたショクダイオオコンニャク」を指すことになっている。新聞、テレビ等で有名になり、開花時には大温室の前に観覧者の列ができるほどであった。すでに部分的に報道されてはいるが、ひとまずこのショクダイオオコンニャクのプロフィールを紹介しておこう。

ショクダイオオコンニャクはサトイモ科の多年草でインドネシアのスマトラ島だけに分布しており、低地から海拔1200mにかけての熱帯降雨林の林床や林縁に生える。地下に球状のイモ（地下茎）があり、葉は地上に1枚だけ出て長い葉柄と傘のように開いた葉身がある。1枚の葉が枯れてしばらくするとまた1枚の葉が伸びてくる。これを何度も繰り返すうちに株がだんだん大きくなり、よく成長したものではイモの直径70cm、重さ70kg、葉柄の長さ4m、葉身の直径は4.5mにもなる。こうなると初めて花が出てくる。花が咲くまでに20年かかると言う説に確かな根拠はないが、かなり長い年月が必要であるに違いない。一般に花とよばれているものは実は多数の花を持つ花序であり、太い花軸の基部にびっしりと雄花・雌花が並んだ肉穂花序とそれを取り囲む赤紫色で葉状の仏炎包からなる。花軸の上部は附属体と呼ばれ、白くローソクのように目立つばかりでなく、独特の悪臭を出して虫を引き付ける役目を果たしている。仏炎包が開くとこの悪臭に誘われてシテムシなどの甲虫が飛来し仏炎包の筒部に落ち込み、もがいているうちに花粉が体に付いて授粉が行われる。

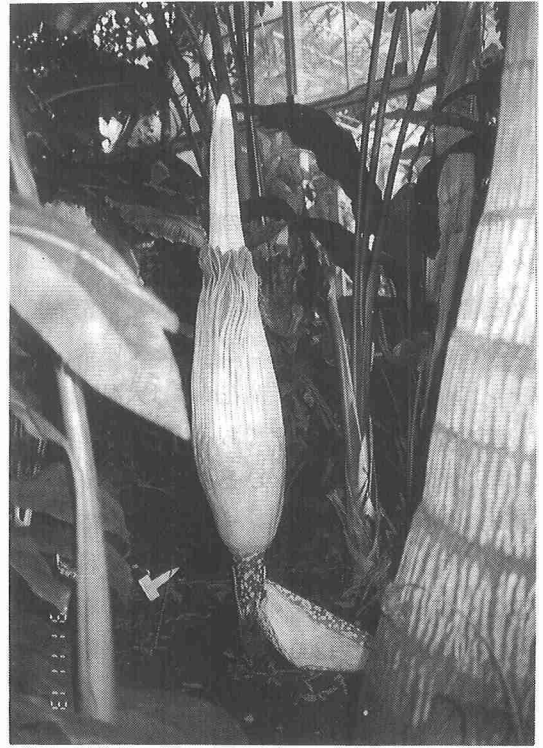
ショクダイオオコンニャクは他の多くの熱帯植物と同様、熱帯降雨林の破壊によって絶滅の危機に瀕している。今年の5月、このような絶滅危惧種を含むアジア地域の植物を保全するためにはア

ジアの植物園を中心とする地域的な対策を講ずることが必要であるとして、東京大学の山上会館で「世界植物園連合アジア連合第1回大会」が開かれた。そして大会と同時に「植物園の保有する世界の貴重な植物展」を開催した。理学部附属植物園では以前から小笠原諸島の絶滅危惧種の増殖・育成に努めており、ムニンノボタン、ムニンツツジなど多数の貴重植物を出展協力することができた。この展示のため、コンニャクの巨大なイモがインドネシアの生物学研究センターの厚意によりスマトラ島で採集され日本に送られてきた。このイモは展示会終了後、植物園の大温室に地植えにされていたが、9月になって思いがけず花序が地上に伸び出し、この段階ではじめてショクダイオオコンニャクであることが明らかとなった。1889年にイギリスのキュー植物園で栽培・開花した記録があり、その後もインド、インドネシア、ドイツなどで開花しているが日本ではまだ確かな開花記録がない珍しいものである。

サトイモ科の地下茎は栄養分を多量に含んでおり、傷がついたりするとそこから腐りやすい。このため移植は一般に必ずしも容易でない。木箱に入ったショクダイオオコンニャクのイモが日本に到着し、ごろりと現れた時に、はたしてこのイモは生きているのか、元気なのか、だれもが心配した。まして地面の下に埋められてしまえばいったい何が起きているのかわからない。それが約3か月たって地上に花芽を出したのである。しかし生きているとわかれば喜びと共に新たな心配もあった。これから次第に寒くなるのに果してこのただものでない熱帯植物は耐えられるだろうかということである。大温室といえは名前はよいが、管理上の問題があって11月10日までは暖房が焚けない。それまでもったとしても老朽化した施設で開

花に十分な環境を保つことができるかどうか危ぶまれた。地下に熱線を埋めるなどの工夫をし、職員一同が見守るなか、幸いなことに花芽は順調にふくらみ、11月18日の夕方からついに開花し始めた。そこでこの貴重な熱帯植物を少しでも多くの人にみてもらうため、植物園では小石川植物園後援会の協力を得て、ショクダイオオコンニャクの開花中は大温室を一般に特別公開した。新聞やテレビの報道で遠くからわざわざこの花を見に来られた人もおり、19日から6日間の公開期間中延べ約6,500人の温室観覧者があった。通常の20倍ほどの数字である。こうなると動物園のパンダとおなじで、温室の入口や通路が狭く多数の観覧者に適していない構造のため交通整理が必要となり、せっかく遠方から来て行列したあげく落ちついて観察できなかったという声もきかれた。また、温室の他の部分で栽培している貴重植物をもっと見たいという希望もあった。

この夏アメリカ合衆国のミズーリ植物園を訪れた際、サトイモ科の分類を専門にしているトーマス・クロート博士から1992年の植物園カレンダーとポスターをいただいた。偶然なことにそのポスターはサトイモ科植物の特集であり、さらに偶然なことはその中にショクダイオオコンニャクの写真が含まれているということであった。ミズーリ植物園は現在、研究施設、植物コレクションの育成管理施設、展示施設と三拍子そろった近代的な植物園となっている。このような充実した施設の背景として、後援会組織が大きな役割を果たしているということはよく知られている。栽培施設のうちにはサトイモ科植物を収集育成するための特別な温室も含まれており、コレクションに基づく研究が続々と発表されている。この温室を訪れて見るところ、栽培されている個々の植物の生育状態は我が東大植物園と差があるようには思えない。珍しさという点でもそれぞれ地域の特色を示してがんばっている。しかしコレクションの豊富さ、多様さには歴然とした差がありとうてい及ぶところではない。少し誇張して言えば人的な努力は必



ずしも劣るものではないが施設はかなわないということになる。

ショクダイオオコンニャクが咲き終わった今、実がなるまで花序を残しておくか、それとも切ってしまうかということが問題になっている。もし実をつけさせればショクダイオオコンニャクのイモは消耗して死んでしまうだろう。実が稔るかどうかかわからないのだから、いっそのこと早く花序を切ってしまうと今の株を生き残らせたほうがよいのではないかというわけである。もしも充実した温室があり熱帯の環境に近付けることができたなら、このような問題は解決できるのと思わずにはいられない。また、少なくとも数年おきに咲かせることができれば、もっと多くの人に観察してもらうことができるのという妙案もある。もしショクダイオオコンニャクが10年毎に花を咲かせるならば、5株栽培しておけば大体1年おきに花がみられるという計算になるわけだが、しかし葉の直径が4.5 mにもなる植物では現在の大温室に1株を維持するだけでも非常に困難なことである。ショクダイオオコンニャクはこの先いったいどうな

ってしまうのだろうか。大学の附属施設として教育・研究の使命を果たすばかりでなく、今や国際的に求められているアジア地域の植物の保全に貢献するためにも、いま少し良い施設が欲しいというのはぜひいたくなことなのだろうか。保全のため



11. 19日 現在

に収集した植物をみすみす枯らすようなことがあれば失礼と言わざるをえない。

邑田 仁 (附属植物園日光分園)

ショクダイオオコンニャク

(*Amorphophallus titanum*) の公開期間中の入園者数 (温室入室者ではない)

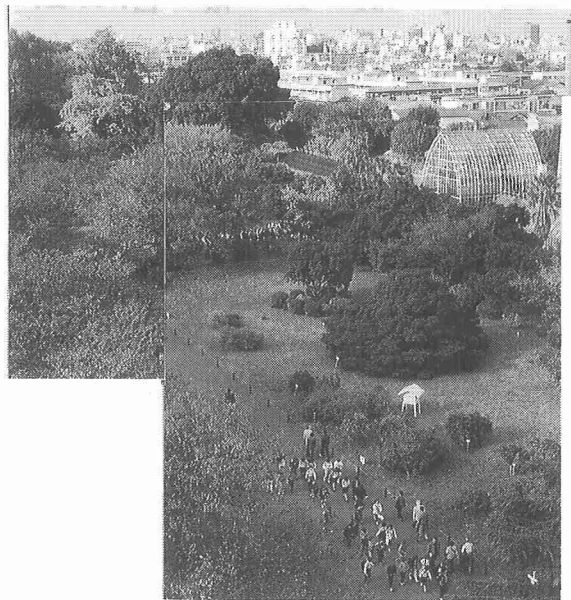
(11月19~20日は通常公開)

月 日	天気	大人	小人	幼児	大学生
11月19日(火)	晴	251名	5名	28名	15名
11月20日(水)	晴	995	33	65	38
11月21日(木)	晴	1092	57	65	18
11月22日(金)	晴	773	34	54	68
11月23日(土)	晴	2093	278	30	39
11月24日(日)	晴	1470	238	318	72
計		6674名	645名	566名	250名
		<u>(総計) 8,135名</u>			

他に優待券利用者約90名 教職員とその家族約120名  
(温室入園者数)

11 / 19 (火)	150名
20 (水)	約1,000
21 (木)	1,170
22 (金)	950
23 (土)	1,735
24 (日)	1,448

計約6,453名 ÷ 6,500名



3. 11. 21 (木) 開花後3日目の園内の様子 (昼頃)